

# 漢方医学講演会

旭川市医師会女性医師部会 副部会長

長谷部 千登美

(医療法人社団慶友会吉田病院)

旭川市医師会女性医師部会研修会の第2回漢方研修会が、2009年3月27日に、旭川グランドホテルで開催されました。昨年度の第1回目には漢方医学における診察法などの総論的なお話を聞きましたが、今回はそれに続いて、各論的で日常診療に応用しやすいお話を聞きたいという部会員からの希望が強く、共催してくださった株式会社ツムラからのご紹介をいただき、北海道大学名誉教授・北海道漢方医学センター附属北大前クリニック院長の本間行彦先生にご講演をお願いしました。以下に、本間先生のご講演内容をご紹介します。

お話の最初に、漢方医学的診察で重要な虚実・陰陽・気血水などの概念を解説していただきました。これらの所見が、薬剤を選択する際に大変重要な意味をもつことがわかりました。

特に、虚実の診断は重要で、柴胡剤・麻黄剤の使い分けに注意を要するとのことでした。柴胡といえば、小柴胡湯が有名ですが、これは従来慢性肝炎の治療薬として広く使われていた時期があり、その際に副作用としての間質性肺炎が問題になりました。これは、アレルギー性急性間質性肺炎という範疇にはいるもので、内服中に息切れが出たら胸部レントゲン検査を行うこと、診断がついたらステロイド内服で治すことが原則とのことでした。

虚実以外に、陰陽、気血水などの診断も重要であること、さらに、症状や病名もひとつの証として捉えるべきであること等のお話をいただきました。例として、一般的なカゼに用いられる漢方頓用処方例につき、具体的な薬剤名を挙げて解説していただきました。

その後、本間先生がライフワークとしておられる、特発性間質性肺炎（IIP）について、詳し

い病態と具体的な治療症例を紹介していただきました。IIPは肺に起こった一種の膠原病と考えるべき疾患であり、自然経過における生命予後は2.5～3.5年といわれています。各症例の虚実・気血水・証を的確に判断して適切な処方を選択することにより、自覚症状や胸部所見の改善がみられ、苦しんでおられた患者様から神様とよばれたこともおありだとのお話でした。このような漢方薬による治療で、IIPの症例の死亡年齢が平均寿命にほぼ匹敵するほど改善されたとのことでした。また漢方治療で血清KL-6の数値が改善するとのデータもありました。このように、IIPに対する漢方治療の有効性を、さまざまな観点から詳しく解説いただきました。

漢方の有用性について、驚くほどの効果が得られた症例の経過なども見せていただき、大変感銘深いご講演でした。さらに、本間先生がラジオでお話された『高齢者の風邪症候群と漢方』というタイトルの小冊子や、カゼ症候群の各種病態ごとの漢方選択基準をまとめた図表も配布されましたので、外来診療などにおいて漢方を処方する際の参考として有難い資料となりました。

漢方医療においては、虚実などの診断と証の判定を的確に行うことが最も重要とのことでしたが、漢方医療に慣れていない医師にとってはその点がまだ課題かと思われます。今回のご講演は、漢方医療の理解を深めるという点で大変有意義なものであったと思われました。